

<祈りのために>

「地上に住む者で、天地創造の時から、屠られた小羊の命の書にその名が記されていない者たちは皆、この獣を拝むであろう。」 ヨハネの黙示録 13章8節

旧約聖書のダニエル書7章には「四頭」の獣が出てきますが、ヨハネの黙示録13章にはダニエルが見た幻を「包含」する一匹の獣が登場しています。「獣」は当時の国家権力の象徴であり、国家権力がキリスト者に悪魔的な支配を行おうとしたことが示されているのではないかと思います。ダニエルが見た幻の獣は、バビロニア、メディア、ペルシャ、ギリシャの国を指しましたが、13章に出てくる「獣」は強大な権力を持ち、諸国を支配するローマ帝国が示されています。ローマ帝国は「五賢帝」の時代もありましたが、皇帝と皇帝を取り巻く臣下により、その地位と権力を争う時代が長期にわたって続き、皇帝の政策によってはキリスト者への迫害が行われました。ヨハネの黙示録が記された年代と、黙示録の宛名の小アジア地域への手紙は、迫害が行われたことと密接な関係があります。

さて、13章に記されている獣は、一定の期間活動することが許されています。12章には「天使ミカエルとその使いたち」が、「火のように赤い竜」と天上で戦い、竜とその使いたちは「ミカエル」に勝つことができず、地上に投げ落とされたとあります。天上の戦いに続いて、この地上においても、悪魔的な支配に対する戦いが継続されているのではないのでしょうか。そして、その戦いは一定期間続くのです。しかし、大切なことは、天上で勝利された神様は、この地上での戦いにおいても、主イエス・キリストの贖いによって、既に勝利されているという信仰を私たちがしっかりと持つことではないかと思います。

この世の権力者は、その時代背景の中で時には自らを神にしました。ローマ帝国時代における「皇帝礼拝」、日本の天皇は「現人神」（あらひとがみ）として心の中まで人々を支配したのです。このような悪魔的な支配に対して、私たちは「屠られた小羊の命の書にその名が記されている者」として、忍耐強く信仰の戦いを続けることが求められているのではないのでしょうか。そして、その戦いは究極的な勝利にあることを確信したいと思います。

祈り

主なる神様、主イエス・キリストの贖いにより「命の書」にその名を記して下さいましたことを感謝致します。どうか、私たちがこの世の力に勝利されたあなたに信頼を寄せ、信仰の戦いを継続していく事が出来ますように導いて下さい。

小林 正（高槻教会長老、近畿中会「教会と国家に関する委員会」委員）

「中国の教会との交わりを望みみて」（2）

渡辺裕子（宇都宮松原教会会員）

「靖国参拝」に対する彼らの反応の根底には、彼らの父親や祖父の世代が次世代に伝え聞かせてきた歴史的記憶がある。わたしが訪ねた杭州も武漢も日本軍の残虐行為の記憶が人々の心に深く刻み込まれた所だ。同時に彼らの反応は、中国政府の主張、そして中国メディアの報道の仕方にも大きく依存している。つまりA級戦犯を祀っている靖国に一国の代表が参拝することは、侵略戦争を美化し、その責任を認めないことだから看過できないというものだ。その前提には“あの侵略戦争は一部の軍国主義者が起こしたもので、日本人民も中国人民と同様の犠牲者である”という有名な周恩来のことばがある。家族を殺され、家と村を焼かれ、財産を失った中国の人々がわが国父と慕った“周総理”のこの発言とそれに基づく教育によって、憎悪の暴発はかろうじて食い止められてきたともいえる。

中国側の主張を裏返せば、靖国からA級戦犯を取り除けばあとは目をつぶるということになるだろう。結局いまだにA級戦犯分祀の問題は宙に浮いたままだが、天皇の名による戦争で戦死した人々を顕彰し、神としてたたえ、あの戦争が祖国防衛・アジア解放のための正しい戦争であったとする靖国的な戦争観からは、「分祀」という考えは出てこない。しかしたとえ外交上の懸案を取り繕うために分祀が達成されたとしても、中国人の多くは本質を見抜くだろう。周恩来が過去の人となり、共産党の深刻な腐敗と相まって政府の統制力が一時期よりもだいぶ落ち始めている（だから余計に言論封殺に力が入る）現在では、分祀でお茶を濁すようなやり方で手を打てば、政府批判が水面下でますます激しくなるかもしれない。

さらに、こうした靖国問題の外交問題へのすり替え、あるいは矮小化によって、より重要な側面が見えなくさせられている。それは言うまでもなく信教の自由、政教分離、つまり教会と国家の問題である。わたしたちキリスト者にとっては、これこそが靖国問題の根幹にあるわけだが、実は例えば侵略戦争を肯定するとして靖国参拝に非常に批判的な中国人の友人であっても、この問題にはそこまで強い関心を示さない人が結構いる。きちんと調べたわけではないが、おそらく靖国合祀拒否訴訟については中国では詳細には報道されていないのではないかと、日本人同様、中国の人々も良心の自由についてあまり深く考えていないのではないかと印象をわたしは持っている。侵略戦争美化という靖国参拝批判に対し、わたしたちは誠実に答えなくてはならないのはもちろんだが、それはキリスト者でなくとも日本の良識ある人々が担い得ることである。しかしそうした戦争観を支えている靖国思想そのものについて、良心の自由については、わたしたちキリスト者こそ語るべきではないか。自ら神社を参拝し、アジアの教会には参拝を強制した神と隣人に対する教会の背信の歴史を絶えず思い起こし懺悔しつつ、信仰の戦いとしての靖国闘争について伝える責任がわたしたちにはある。

とりわけ、社会的政治的状況は大きく異なるものの、教会と国家の問題に絶えず直面し、苦悩している中国の教会の心ある人々に対し、わたしたちは語らなくてはならない。もし日本キリスト教会が、いつになるかはともかくとして、台湾だけでなく中国の教会とも交わりを持ちたいと少しでも考えているのなら、なおさらこの務めを真剣に考えるべきだと思う。ここで中国の教会がおかれた政治状況について詳論する紙幅はないが、わたしたちが望んだとしても、教会の公的な交わりが実現するにはかなり時間がかかるだろう。しかし幻を抱きながらその日の到来に備えることはできる。それは、日本の侵略によって多くの苦しみをこうむった中国の教会に対しわたしたちがないうるほとんど唯一の奉仕ではないだろうか。その時に問われるのは、わたしたちに語る言葉があるのか、過去の歴史から、靖国闘争から何を学んだのか、果たしてどこまでその本質を受け継ごうとしているのかということである。

靖国神社問題全国協議会の報告

主題：『日本キリスト教会 50 年史』を読む

…「靖国神社問題への取り組み」はどう記述されたか…

パネラー 鈴木和哉牧師（吉田教会） 齋藤 修牧師（磐田西教会）
古賀清敬牧師（宣教教師） 上西創造長老（小倉教会）

10月9日に大阪北教会で開催。参加者：56名。

今年の協議会は例年とは違うスタイルで行われました。昨年発行された『日本キリスト教会 50 年史』は、当然のことながら靖国神社問題だけに焦点を当てて書かれているわけではありません。従って「50 年史」の記述から、私たちが何を学び取り、それをどうやって未来につなげて行くかということが協議会の課題となるのです。

この協議会では4人のパネリストが「50 年史」の記述をそれぞれ分担し、まとめた上で発題しましたが、その中で、靖国神社問題に対する日本キリスト教会の歴史的な取り組みが、今の視点から見ると遅々とした歩みに見えることが明らかになりました。例えば 1952～54 年の大会で、戦争と平和に関することや国家神道の復興に対処する目的で提出された建議案がことごとく否決されてしまいます。1958 年の第 8 回大会で「原水爆実験並びに製造禁止に関する建議案」が可決、1967 年の第 17 回大会で「靖国神社に関する建議案」が可決され、全教会的な取り組みになるという流れになりますが、その時点でもアジア諸国に対する戦争加害者としての視点は不在でした。

そもそも 1951 年の教団離脱と新しい日本キリスト教会の建設自体が、わずかな例外を除き、戦前から国家権力に妥協し、戦争に加担したことの悔い改めからではなかったのです。そうした姿勢は現在もなお残っており、罪意識を欠くならば、信仰は容易に「教養的信仰」「文化的信仰」に陥りやすく、神社と色濃く関わるこの国の風土に飲み込まれてしまうでしょう。

鈴木牧師は、いつも良心的な説教をしながらメッセージが時代と交差しない牧師の例をあげ、その立脚点となった神学の質を問題にされました。ただ「後代の我々が後代の方法で批判することは、どれほど鋭くとも神学作業にはなりません」。私たちが過去の教会の負の遺産を負っていることを自覚することで、厳しい課題が与えられた協議会でした。（井上豊 広島長束教会牧師 大会靖国神社問題特別委員会委員）

<ヤスクニ・ニュース>

国交正常化：日韓交渉の文書開示を命令 東京地裁が初判断

日本の歴史研究者や戦後補償を求める韓国人ら（日韓会談文書・全面公開を求める会）は、1951～65 年に行われた日韓国交正常化交渉を巡る外交文書を、外務省が不開示としているのは違法だとして全面開示を求めていた。その訴訟の判決が、11 日、東京地裁であった。裁判長は不開示となっていた部分の 7 割以上の開示を命じた。その中には、竹島（韓国名・独島）に関する交渉記録も含まれており、開示されれば日韓関係にも影響を与える可能性がある。

原告側は 06 年から開示を請求していた。外務省は 348 点に及ぶ文書について、「日韓国交正常化交渉に影響する恐れ」や「竹島問題などに関する韓国との交渉上不利益になる恐れ」などを理由に、全部または一部の文書を不開示としていたが、裁判では、(1)竹島問題

に関する日本側の提案や見解 (2)韓国側から示された提案や見解 (3)第三国の見解…について「不開示にする事情が認められない」と判断した。

判決は、外務省が開示しなかった文書全体の約7割強の開示を義務付けた。外務省の規則上、30年以上が経過した文書を不開示とするには「国の安全確保などに影響があると、法的保護に値するほどの蓋然(がいぜん)性をもって立証する必要がある」と指摘し、外務省は証明できていないと判断した。(毎日・日経10月11日)

謝罪を明確にした「海づくり大会」を!

11月17日(土)～18日(日)に、「全国海づくり大会・沖縄」に天皇が出席するため、沖縄では「海づくり大会への天皇出席反対!アクション」(呼びかけ人83名)を結成した。その理由は、1. オスプレイ配備と女性暴行事件の渦中にある中、領土問題を理由にした自衛隊増強・日米軍事同盟強化・憲法改悪の動きが、政界の改憲派や保守的なマスコミ・文化人から進められつつある。そんな脈絡の中で天皇が沖縄に来るその狙いは、日本政府の方針に抵抗しない従順な沖縄県民づくりと軍民共同防衛の一体化を意図していると思われる。2. 現天皇は皇位を継承しており、昭和天皇の戦争責任(沖縄戦「捨石」作戦や「天皇メッセージ」と「国体(天皇制)護持」)を担っている存在にある。ところが、就任(即位)後の1989年1月9日の「天皇の詔勅」で、昭和天皇の業績を賛美している。来沖するならば、“謝罪”を明確にした「海づくり大会」の開催を要求する。記者会見・公開質問状・シンポジウム・デモ行進などを予定。

(報告 川越弘 沖縄伝道所牧師 大会靖国神社問題特別委員会委員)

ネットウヨとは何か? 若者たちがのめり込む「愛国という名の階級闘争」

ネット右翼とは何者か。彼らは「朝鮮人は嫌い。犯罪者だ。日本を貶め日本人を嫌っていながら日本に住み続ける。許せない。なめられっぱなしだ。あの民族によって歴史は捏造され、我々は土地も資産も奪われ、日本が日本でなくなってしまう」という。彼らにとっては、韓国と北朝鮮は「敵国」であり、在日コリアンは「侵略者」である。売国奴(民主党)が政権を握った。外国人参政権が成立する。「在日」が日本に反旗を翻す。在日だけでなく、マスコミ、労働組合、左派系市民運動が「新たな敵」。これらは全て日本を貶める売国奴だと言う。外国籍住民が日本人の「生活や雇用」を脅かし、社会保障を“ただ乗り”しているという強烈な被害者意識の中に、彼らは日本人つまり自分の姿を想像しているようだ。

彼らのある者は、不登校を経験し学校に良い思い出を持っていない。転職を繰り返し、抱えきれない不安と不満と憤りをどうコントロールすればよいのか。自分の立っている場所はあるべき日本ではないと考え、世の中のあらゆる理不尽を「敵」の責任に転嫁する。雇用不安も経済的苦境も福祉の後退も韓流ドラマやK-POPの隆盛も、全て「敵」の陰謀とする。何かを「奪われた」と感じる彼らにとって、外国籍住民が手厚く守られている(と思いついでいる)ことに、耐えられないようだ。

(SAPIO 12年8月22・29日号から掲載…概要)

694号 ヤスクニ通信 2012年11月11日
発行 日本キリスト教会靖国神社問題特別委員会
発行人 加藤正勝 編集人 川越弘
印刷・発行 栗田英昭 (多摩ニュータウン
永山伝道所) 〒206-0025 東京都多摩市永山
1-16-11 TEL&FAX 042-376-9514